

西洋建築史
試験問題

中島 智章

1. 次の問いに答えて、要求されたイラストを描きなさい。 配点: 10点

稜堡式築城術の、「堀」以外のディテール名称を四つ挙げよ。また、稜堡式築城術の断面略図を、大砲や兵士の位置が分かるように描き、その略図に上記のディテールのうち三つを適切な位置に書き入れよ。

ディテール名称	1)	2)	
	3)	4)	配点: 4 × 1点

稜堡式築城術略図	配点: イラスト3点(上 = 3点、中 = 2点、下 = 1点、なし = 0点) ディテールの位置付け 3 × 1点
----------	---

2.次の文章中の空欄を適切にうめる名詞を解答欄に記入せよ。 配点:30問×3点=90点

人名はフルネームで記すこと。名字のみは1点。個人名のみは0点。アルファベット表記は0点。

- 1) 古代エジプトでは神々の住まう神殿は石造である。末広りの巨大な入口「(a)」と、奥に行くほど狭くなる(b) (天井も石造でスパンを短くしなければならなかった)の連続からなる。入口には(c)という尖塔が建立されることもある。自然の地形を利用する場合もあり、第18王朝時代に建設された(d)女王葬祭殿(前1485頃)は岸壁をテラス状に整えたもの。 a) b) c) d)
- 2) 現存する古代唯一の建築書『建築十書』を著した(a)によると、古代神殿の平面形式は、神室と柱の関係によって次の7種に分類される。すなわち、イン・アンティス式、プロステュロス=(b)式、アンフィプロステュロス=両(b)式、ペリプロテロス=(c)式、プセウドディプロテロス=擬二重(c)式、ディプロテロス=二重(c)式、露天式である。 a) b) c)
- 3) バシリカ式の教会堂の内部は通常三つの細長い空間で構成される。(a)という中央の空間と左右両脇の(b)という空間の三つである。(a)と(b)の間は列柱で区切られている。(a)は(b)よりも天井が高い。これを三(c)式と呼ぶ。大きな教会堂では(b)が左右にそれぞれ二つずつ付いて五(c)式となるものもある。 a) b) c)
- 4) 12世紀になって(a)大聖堂が忽然と姿を現した、と考えるのは間違いである。(b) (尖頭アーチ)、リブ・ヴォールト、(c)、みな(a)以前に別個にあった技術である。むしろ、大地から天上をめざす精妙な枠組と、それに支えられた「軽さ」こそが(a)建築の要点であり、このような高さと軽さを実現するために様々な技術が用いられたのであろう。 a) b) c)
- 5) アルナルフォ・ディ・カンピオが構想したフィレンツェの(a)大聖堂は13世紀末から15世紀にかけて建設されたが、内径42メートル、高さ36メートルのクーポラをどのように建設するかで行き詰まっていた。1418年にアイデアを募るコンペが催され、若き(b)の案が採用された。彼は、翌年、コリント式円柱と半円アーチを用いた(c) (捨子養育院)を手掛けた。 a) b) c)
- 6) マニエリスムの建築家(a)はパラッツォ・デイ・コンセルヴァトーリなどで、1階につき1オーダーという初期、盛期ルネサンスの常識を覆し、1階と2階をぶちぬいた巨大なオーダーを使用した。これを(b)オーダーという。一方、ローマの建築家(c)はパラッツォ・マッシモで、円柱をペアにして列柱を形成する手法を初めて用いた。これを(d)柱という。 a) b) c) d)
- 7) 1517年のマルティン・ルターの抗議に端を発するプロテスタント諸派の「宗教改革」に対して、カトリック側からの自己改革の動きを「反宗教改革」といい、(a)様式はその芸術的表れである。形態的には、凹凸の激しい壁面や楕円の使用が特徴で、(b)が設計した(c)教会堂(四つの泉のある四辻に面していることからそう呼ばれる)が代表例。 a) b) c)
- 8) 太陽王(a)世の権勢を象徴する(b)宮殿は、先王の小さな狩の館を核として、国王付首席建築家(c)が大宮殿へと発展させたものである。1670年に彼が亡くなった後はフランソワ・ドルベがその計画を実行に移していったが、1678年以降の鏡の間の造営からは(d)が担当し、以後、彼が(b)の造営事業を統括していくことになる。 a) b) c) d)
- 9) ドリス式はギリシアとローマで違いがあり、後者の方がより細く、柱身の下に(a)を備えている。近世には後者が用いられたが、パエストゥム発掘やアテネでの実測調査の進展によって古代ギリシア建築の真の姿が明らかとなり、ギリシア風オーダーを用いた(b)・リヴァイヴァル建築が出現する。仏人(c)はその傾向とマニエリスム様式を巧みに融合した。 a) b) c)